

スコイエン・コレクションの『新歳経』断簡について

松 田 和 信

1. スコイエン・コレクションとは

今から数年前、正確な場所は不明であるが、アフガニスタンのパーミヤン渓谷北部の自然の洞窟の中で、アフガン難民によって大量の仏教写本が発見された。それらは分割されてパキスタンに持ち出され、中継基地のドバイからロンドンの複数の仲介業者を経由して、最終的にそのほとんどはノルウェーのスピッケスタッドに住む写本蒐集家マーティン・スコイエン (Matrin Schøyen) 氏に引き取られ、氏のコレクション (Schøyen Collection, 略号 SC) に加えられた¹⁾。その中には、カローシュティー文字による貝葉写本から、ギルギット・パーミヤン第 1 型、同第 2 型書体の写本に至るまで、貝葉、樺皮、皮革に書かれた、恐らくは 2 世紀から 8 世紀にかけての様々な仏教写本の断簡が含まれている。

このコレクションに含まれる仏教写本に対して、オスロ大学のイェンス・ブロールヴィック (Jens Braarvig) 教授を中心に、同じオスロ大学のフォン・ジムソン (Georg von Simson) 教授、ミュンヘン大学のイェンス＝ウヴェ・ハルトマン (Jens-Uwe Hartmann) 教授、ベルリン・インド博物館の元学芸員ローレ・ザンダー (Lore Sander) 博士および筆者を含む 5 名のグループによって 2 年前より共同研究が開始され、グループは写本の分類、整理から始めて、メンバーの住む各地で定期的に研究会を開きつつ (オスロとスピッケスタッド 1997 年 11 月および 1998 年 11 月、ベルリン 1998 年 6 月、京都 1999 年 5 月) 現在その出版に向けての準備を進めている²⁾。

2. コレクションの総数とその内容

コレクションに含まれる写本のほとんどは断片で、完全なフォリオは数えるほどしかないが、研究を開始するにあたって、グループはまず断簡を書体別に分類し、その 1 点 1 点に 'SC' で始まる登録番号を付ける作業を行った。その書体別総数は以下の通りである。

1. カローシュティー文字：約 200 点 (すべて貝葉)
2. クシャーナ文字：約 240 点 (すべて貝葉)
3. 北東型グプタ文字：約 330 点 (すべて貝葉)
4. 北西型グプタ文字：約 700 点 (ほとんど貝葉，樺皮と皮革が十数点)
5. ギルギット・バーミヤン第 1 型文字：約 550 点 (多数の樺皮と少数の貝葉)
6. ギルギット・バーミヤン第 2 型文字：約 110 点 (すべて樺皮)
7. バクトリア語仏教写本断簡：2 点 (皮革)

これらの書体による分類はインド文字学の専門家であるザンダー博士の編年に基づいている。恐らくは、上記の分類が 2 世紀から 8 世紀に至る写本の年代を反映しているのであろう。この分類を見れば、バーミヤンあるいはガンダーラ地域では、バクトリア語皮革写本は別にして³⁾、古い時代にはもっぱら貝葉が使用されていたのが、やがてそれが徐々に樺皮に取って代わられたことが暗示されているようで大変興味深い。なおコレクションには、これ以外にギルギット・バーミヤン第 1 型書体による樺皮写本の束 (1 点に数十葉が含まれる) が数点あるほか⁴⁾、登録番号が付けられていない小さな破片 (ギルギット・バーミヤン第 1 型書体による樺皮写本の破片がそのほとんどを占める) が数千点認められる。従って総数としては、我々がいちいち数えたわけではないが、スコイエン氏によると全体で一万点を超えるという。

次にコレクションの中に発見された具体的文献名であるが、その中には、カローシュティー文字による『大般涅槃経』の未知のヴァージョン (『長阿含』「遊行経」に一致点が認められる)、クシャーナ文字による『八千頌般若経』(大乘經典の現存最古の写本)、ギルギット・バーミヤン第 1 型文字による『摩訶僧祇律』、さらに同じ書体による因縁物語付き『法句経』の断簡 (これは大衆部の法句経の可能性あり) など、現在数十点の文献名が判明しているが、これらはコレクション全体から見てほんの数パーセントにすぎない。恐らくはクシャーナ文字写本など、あまりにも時代的に古い写本が数多く含まれるため、漢訳あるいはチベット語訳に対応文献の存しないこと、また文面から阿含、阿毘達磨の断簡も数多く認められるが、これらも説一切有部以外のすでに失われた部派文献が数多く含まれていると考えられること等、将来における同定作業は楽観を許さない。なお筆者は、共同研究が開始された経緯とコレクションの内容等について、すでに数篇の報告を公にしているので参照していただきたい⁵⁾。現在までのところ、学術論文の形で発表されたものは、ハルトマン教授によってポール・ハリソン教授の助力を得て出版された『阿

闍世王経』の断簡1葉のみである⁶⁾。

3. スコイエン・コレクション SC2378/1 について

さて1997年11月の初めに、オスロの南約40キロメートルの田舎町、スピッケスタッド (Spikkestad) 郊外のスコイエン氏の山荘においてグループがコレクションの整理を開始した時、まず我々の目に飛び込んできたのは、完全な数葉を含む約50点の一連の写本断簡であった。これらには‘SC2378/1’の登録番号が付けられたが、北西型グプタ文字 (North-Western Gupta Brāhmī) による貝葉写本断簡で、サイズ (完全なフォリオで約3.5 cm×38 cm) と行数 (各葉3行ないし4行) から、すべて同一写本に属する断簡であると判断された。またザンダー博士の意見では、書体からしてその年代は4世紀中頃に溯るという。我々は直ちにこれがただ1つの文献を書写した写本ではなく、そこには複数の経典が含まれていることに気づいた。そしてやがて判明した文献は『勝鬘経 (Śrīmālādevīsīṃhanādanirdeśa)』 (完全な3葉と2断片)、『諸法無行経 (Sarvadharmāpravṛttinirdeśa)』 (完全な2葉と約20断片)、『阿闍世王経 (Ajātaśatrukaukṛtyavinodanā)』 (約20断片) という、それまでその断片すら梵文写本の存在が知られていなかった3つの大乘経典であった⁷⁾。さらに完全なフォリオ、あるいはフォリオの左端の残存している断片には三桁のフォリオ・ナンバーが書かれていたが、その番号から判断して、3つの経典は『勝鬘経』→『諸法無行経』→『阿闍世王経』の順序で連写されていたらしいことも推定された。

しかし問題が残った。筆者の計算では『勝鬘経』は失われた第319葉から始まり、回収されてフォリオ・ナンバーが確認できる第392葉の表面最終行で終わるが、その裏面に書写されていたのは次に始まるはずの『諸法無行経』の冒頭部ではなく、何らかの別の経典の冒頭部分だったのである。その後、ブローラヴィック教授の研究により、『諸法無行経』は、そのフォリオ・ナンバーは失われているものの、右側約3分の2が回収されて第397葉と推定できる1葉の表1行目から始まることが確認された。従って『勝鬘経』と『諸法無行経』の間には、第392葉裏面から第396葉末尾までの計5葉半のスペースを満たす別な短い経典が書かれていなければならなかった⁸⁾。

4. 『新歳経 (*Pravāraṇāsūtra)』の発見

5葉半のスペースを満たす未知の小経典は何か。幸運にもその冒頭部、つまり第392葉裏面はほぼ完全な形で読むことができるので、我々は次のようなローマ

字転写に基づいて同定を試みた⁹⁾。

1 siddham* || evam ma[ya] śru[ta]m e[ka]samaye○ [bha]gavā(m) śrā[va]sti .. [vi](ha)[rati] jetavane
anāthapiṇḍadasyārāme mahatā bhikṣusamghena sārddham [catura] śītibhih bhikṣusa [ha]srebhi[h] śāri-
putramaudgalyāyana {na} bhikṣupūrvvam-

2 [ga]m (e)bh[i]h dakṣ[i]napāścimena bhagavato (n)i○[saṅnakāh] atha bhagavām sumerurāja {m}
iva abhyudgato bhāsati tapati virocati kanakaparvata iva abhyudgato pariśāmaṇḍalamadhyagato
niṣaṅnako bhikṣusamghasya madhye

3 atha bhagavā niradbhute bhikṣusamghe nirga○te traīmāse varṣāvāsa uṣito śāntaprasāntena bhi-
ksusamghena sthito | athāyusmān ānamdah utthāyāsanāto ekām[śe] civa[ram] pravāritvā dakṣiṇam
jānumaṇḍalam pṛthivi-

4 ye pratīṣṭhāpayitvā yena [bha]gavām te○nāmjali<m> pranāmāyitvā bhagavato gāthābhi adhvabhāṣi
(sic) yasyārtham tvam lokavidū vināyakā tremāsavuso(sic) iha je[ta]sahvaye | paripūma āśā aya

しかし同定作業は容易ではなかった。他の3経典が大乗経典だったこともあり、また内容も短い大乗経典の冒頭部として違和感は感ぜられなかったので、筆者は漢訳とチベット語訳大蔵経に含まれるすべての大乗経典にあたったが、対応する大乗経典を見いだすことはできなかった。他のメンバーも同様であった。しかし本年(1999年)4月になって、遂にその正体が筆者によって判明する。これは『新歳経(大正蔵 No.62, vol.1, pp.859-861)』として漢訳された経典の断簡だったのである。我々は、大乗経典ばかりを探して大蔵経の阿含部を考慮外に置いていたのである。この断簡に対応する漢訳『新歳経』の冒頭部は次の通りである¹⁰⁾。

聞如是。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。與大比丘衆八萬四千人俱。舍利弗目連等。前後圍遶。聽佛説經。佛處大會。猶如須彌衆山之王。獨峻高顯。如月盛滿照于群星。威光唯景。如紫金耀於是場地。皆作金色。卓然特異。巍巍無侶。於時世尊。與比丘衆俱。清淨無量。如日如雲。終竟三月。以至新歲。諸比丘衆寂然憚怕。一心自思念於道。定無有異想。於是賢者阿難。即從座起。徧袒右臂。右膝著地。長跪叉手。前自歸佛足。以偈數曰。

佛尊所以來 遊比以濟護 三月處於斯 祇樹孤獨園

所願以具足 今正是其時 導師無等倫 應宣布新歲・・・

大正大蔵経で『新歳経』は、その異訳が多く漢訳大蔵経に認められる、いわゆる『自恣経(Pravāraṇā-sūtra)』の異訳の一つとされている¹¹⁾。しかし筆者の見るところ、パーリ語大蔵経に含まれる Pavāraṇāsutta や、現在は大英図書館の OIOC (Oriental and India Office Collections) に保存されているヘルンレ・コレクション (Hoernle Collection) 中の同経の梵文断簡を含め¹²⁾、これ以外の『自恣経』類は内容的にほぼ共通していて、異訳あるいは別ヴァージョンと見なして差し支えないものの、こ

の『新歳経』のみ、「自恣(雨期の最終日に行われる行事)」あるいは「新歳(雨明け後の新しいシーズンの初日)」をテーマとしていたとしても、その内容は他とは全く共通点がない。經典冒頭部も他とは全く異なる。なぜこれが『自恣経』の異記とされているのか理解に苦しむ。従って漢訳『新歳経』を唯一の参考資料にして、暫定的ではあるが、断簡から回収される經典冒頭部のテキストを筆者は以下のように再構成した。

evam ma[yā]sru[ta] m e[ka]samaye [bha]gavā(m) śrā[va]sti(ye) [vi](ha)[rati]jetavane anāthapi-
 ṇḍadasyārāme mahatā bhikṣusamghena sārđham [catura]śitibhiḥ bhikṣusa[ha]srebhi[h] Śārip-
 utraMaudgalyāyanabhikṣupūrvam [ga]m (e)bh[i]ḥ dakṣ[i]ḥ napaścimena bhagavato (n)i[ṣaṅṅak-
 āḥ] <|> atha bhagavāṃ sumerurāja iva abhyudgato bhāsati tapati virocati kanakaparvata iva abhy-
 udgato pariśāmaṇḍalamadhyagato niṣaṅṅako bhikṣusamghasya madhye <|> atha bhagavā<ṃ> nir-
 adbhute bhikṣusamghe nirgate traimāse varṣāvāsa uṣito śāntaprasāntena bhikṣusamghena sthito |
 athāyusmān Ānaṃdaḥ utthāyāsanaṭo ekāṃ[śe] civa[raṃ] pravāritvā dakṣiṇaṃ jānumaṇḍalaṃ
 pṛthiviye pratiṣṭhāpayitvā yena [bha]gavāṃ tenāṃjali<ṃ> praṇāmayitvā bhagavato gāthābhi adhy-
 abhāṣi <|>

yasyārtham tvam lokavidū vināyakā tremāsavaso iha je[te]sāhvaye |
 paripūrṇa āśā aya…………… ||

[試訳] このように私は聞いた。ある時世尊は、シュラーヴァステイ(舍衛国)のジェータ林のアナータピンダダの庭園に比丘シャーリプトラとマウドガルヤーヤナに率いられた八万四千人の大比丘集団とともに滞在していました。[そこで比丘集団は]世尊を[左]右[前]後から取り囲んでいました。その時世尊は、集会の真ん中でスメール山の如くそびえ立ち、輝き、燃え立ち、光っていました。[さらに]比丘集団の真ん中でカナカ山の如くにもそびえ立っていました。さて世尊は、希有なる比丘集団が三ヶ月にわたる雨期の定住を終えた時にも、たいそう寂靜となれる比丘集団とともに止まっていた。さてその時、長老アーナンダは座より立ち、一方の肩に上衣を掛け、右膝を地面につけて世尊に向かって合掌して、偈をもって世尊に語りかけました。

何の為に、ここジェータと呼ばれる[林]において、三ヶ月の定住をもてるあなた、世を知るお方、教戒師であるお方は望みを満たし…

断簡から回収されたテキストは、イレギュラーな仏教梵語形を多く含み、読解困難な点も残されているが、上記漢訳『新歳経』の冒頭部と比較すれば、多少の相違点を差し引いても両者が同一文献であることが容易に理解される。また断簡のフォリオ・ナンバーから推定される5葉半という本経の長さも、漢訳が大正大蔵経で2頁というサイズと一致しているように思われる。漢訳『新歳経』は曇無

蘭によって西暦 381 年から 395 年の間に翻訳されたが、両者を比較すると、梵文と比べて漢訳の方に増広箇所が認められるようである。とすると、この写本が書写された年代の方が漢訳年代より古いのではないかという驚くべき事実、つまりザンダー博士の書体の編年による年代設定の正しさに一つの根拠を与えることになると言えるのかもしれない。

では『新歳経』が『自恣経』の別バージョンの類ではなく、内容的にも無関係であるとするなら、これは果たして阿含であるのか、あるいは大乘經典であるのか。確かに本経は漢訳では阿含部に収められてはいるが、上記の經典冒頭部は阿含経としてはあまり類例がなく、ここでは残念ながら紹介できないが、漢訳の他の部分、および本経に属すと思われる他の複数の梵文断片から判断して、『新歳経』は阿含の体裁よりも大乘經典の体裁に従っているように思われるのである¹³⁾。

5. 最後に——大乘經典連写写本の可能性——

SC2378/1 の登録番号で回収された断簡類は、完全な数葉を含むとはいえ、50 点ほどの断片にすぎない。しかし存在が確認された 4 つの經典のうち、第 4 の『阿闍世王経』では五百番台後半のフォリオ・ナンバーが付けられている。4 経のうち、3 経は明らかな大乘經典、さらに最後に同定された『新歳経』も大乘經典であった可能性がある。失われた数百に上るフォリオには一体いかなる經典が写されていたのであろうか。これはいくつもの大乘經典を連写した写本だったのではないか。残念ながら、そのほとんどはすでに失われたと思われるが、あるいはいくつかのフォリオは戦乱のアフガニスタンのどこかに、またもしかして今なお引き取り手を求めて古書世界のマーケットをさまよっているのかもしれない。

ここからは筆者の単なる想像にすぎないが、このような形態の写本がインド文化圏に種々あったとすれば、例えば『大宝積経』や『大集経』の成立事情もそれから類推できるのではないか。『大宝積経』は 49 の大乘經典、『大集経』は 17 の大乘經典のコレクションで、49 あるいは 17 の經典には、それを貫く共通テーマは全く存在しない。インドではこのように一つの写本に脈絡なくいくつもの大乘經典を連写することが普通に行われていたのではないだろうか。4 世紀中頃に溯るこの写本も、そのさらなる複写が当時の中国に伝えられていたなら、第二の『大宝積経』あるいは第二の『大集経』がその後の仏教史上に現れることになったのかもしれない。

1999 年 8 月 14 日

- 1) スコイエン氏のコレクションには、アフガニスタンの洞窟以外 (たとえばパキスタンが実効支配するカシュミール地域等) から出土したと思われる文献も若干含まれているようである。1997年10月刊の氏の私家版カタログ (*The Schøyen Collection; Checklist of Manuscripts 1-2393*, Oslo 1997) では約2400点もの蒐集品が登録されているが、その中心となるものは氏が本来関心を寄せている聖書写本等の仏教以外のものである。その中には断片ではあるが死海文書といった世界的に貴重な文献が含まれている。
- 2) 順調に行けば、恐らくその第1巻は *Manuscripts in the Schøyen Collection 1; Buddhist Manuscript*, vol. 1 と題されて来年 (2000年) オスロより刊行されることになる。
- 3) 2点だけ含まれるバクトリア語皮革写本が仏教文献であることは間違いない。ただし年代は定かではない。グループが研究を依頼しているロンドン大学のニコラス・シムズ＝ウィリアムズ (Nicholas Sims-Williams) 教授の解説結果によると、これらは何らかの経典を写したのではなく、『法華経』あるいは『無量寿経』に現れる種々のブツダの名称を羅列した文献のようである。なお、バクトリア語写本も現在アフガニスタンから続々と現れている。同教授「古代アフガニスタンにおける新発見—ヒンドウークシュ北部出土のバクトリア語文書を中心に—」『ORIENTE—古代オリエント博物館情報誌』16号 (1997) pp.3-17, *The New Light on Ancient Afghanistan; the Decipherment of Bactrian* (London, 1997) 参照。
- 4) メンバーはそれぞれコレクションのカラー複写をスコイエン氏より受け取っているが、これらの樺皮写本は癒着部分があって素人の我々には取り扱い不能のため現在修復に出されている。従って写真は未入手。調査の際に少し剥がして読んだところでは『薬師経』『金剛般若経』の写本が含まれていたことを記憶している。
- 5) 「アフガニスタンからノルウェーへ—本当はなかったことになるかも知れない話—」『佛教大学総合研究所報』13号 (1997年12月) pp.24-28。「ノルウェーに現れたアフガニスタン出土仏教写本—マーティン・スコイエン氏のコレクションを訪ねて—」『月刊しにか』1998年7月号, pp.83-88。「シアトル、そして再びオスロとロンドンへ」『佛教大学総合研究所報』15号 (1998年12月), pp.14-16。「ノルウェーのスコイエン・コレクションと梵文法華経断簡の発見」『東洋学術研究』38-1 (1999), pp.4-19。
- 6) Jens-Uwe Hartmann & Paul Harrison “A Sanskrit Fragment of the Ajātaśatru-kaukrtya-vinodanā-sūtra”, *Sūryacandrāya; Essays in Honour of Akira Yuyama on the Occasion of His 65th Birthday* (*Indica et Tibetica*, 35), (Swisttal-Odendorf, 1998), pp.67-86。
- 7) 『勝鬘経』と『阿闍世王経』は著名な大乘経典であるので筆者がここで改めて解題を与える必要もないであろう。あまり知られていない『諸法無行経』については、鳩摩羅什訳 (大正 No. 650) を含めて、3種の漢訳とチベット語訳 (P. ed., No. 847) が存する。*Śikṣāsamuccya* にも引用されている。『大乘経典解説辞典』(北辰堂, 1997年) pp.361-362における浅野守信氏の解説を参照。なお『勝鬘経』は筆者によって、『諸法無行経』はプロールヴィック教授によって、さらに『阿闍世王経』はハルトマン教授によって、コレクションの出版第1巻 (注2参照) の中で、その全断簡がカラー写真、テキスト、英訳を含んで公開される予定である。

- 8) この推定は数え間違いではなく、詳しい説明は省くが、残存する他の断片から二重番号の入った2葉が含まれることが推定されるので計5葉半となる。
- 9) 転写に用いた記号はドイツ・ゲッチングン方式による。この転写は、1999年5月の京都での研究会において最終的にメンバー全員によって修正、確認されたものである。なお第392葉自体にはSC 2378/1/3の登録番号が付けられた。本葉はほぼ完全な1葉であったが、最初の調査時点では、左端に一部欠落部分(文字にして6ないし8文字分)が見られた。その後、ハルトマン教授を手伝っているゲッチングン大学のクラウス・ヴィレー(Klaus Vile)博士によって、我々がすでにSC 2379/3/2bという別番号で登録していた小断片がその欠落部分に他ならないことが発見された。
- 10) 筆者は台湾の蕭鎮國氏が入力した漢訳『新歳経』のデータをコンピュータ上で利用させていただいた。お礼申し上げる。
- 11) 『雑阿含』1212経、大正2, p. 330a-c, 『別訳雑阿含』228経、大正2, p. 457a-c, 『中阿含』121経、大正1, p. 610a-c, 『増一阿含』巻6, 大正2, pp. 676b-677b。他に単訳として『解夏経』大正1, pp. 861b-862b, 『受新歳経』大正1, pp. 858a-859aがあるが後者は『増一阿含』所収経と同一である。
- 12) Pāli, *SN*, vol. 1, pp. 190-192, 'Pavāraṇā'. ヘルンレ・コレクション中の梵文断片については、*Manuscript Remains of Buddhist Literature Found in Eastern Turkestan* (vol. I), (Oxford, 1916), pp. 36-40, さらにこれとは異なる断片がハルトマン教授とヴィレー博士によって同コレクション中に発見されているが未出版。Die nordturkistanischen Snskrit-Handschriften der Sammlung Hoernle (Funde buddhistischer Sanskrit-Handschriften, II), *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen II* (*Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte den Turfan-Funden*・Beiheft 4), Göttingen, 1992, p. 32.
- 13) その詳細については出版第1巻(注2参照)の中で筆者によって述べられる予定であるので本稿では御容赦いただきたい。SC 2378/1に含まれる断簡中には、本稿で取り上げている1葉以外にも『新歳経』に属すと思われる複数の断簡が確認されている。なお本経のタイトルである「新歳」の語については、本文で紹介した冒頭部の漢訳に一度現れるが、断簡中には対応する語は認められない。この語の原語が何であるのか筆者は寡聞にして知らない。本経の梵文表題も『新歳経』という漢訳名に対応する梵文タイトルがありえたのか、あるいは *Pravāraṇasūtra* なる表題が『新歳経』と訳されただけなのか現時点では判然としない。さらに「自恣」の原語についても、これとは別な断簡中には *prāvāraṇā* (あるいは *prāvāraṇa*) なる語形も確認されていることを補足しておきたい。

本稿は平成11年度文部省科学研究費補助金「特定領域研究(A)」による研究成果の一部である。

〈キーワード〉 *Pravāraṇasūtra*, 新歳経, 梵文写本, スコイエン・コレクション

(佛教大学教授)